

『旅夜書懷』 杜甫

絶望的な自嘲のつぶやき

旅夜懐いを書す 杜甫

細草微風岸 細草微風の岸

危檣獨夜舟

危檣獨夜の舟

星垂平野闊

星垂れて平野闊く

月湧大江流

月湧いて大江流る

名豈文章著

名は豈文章にて著れんや

官應老病休

官は應に老病にて休むべし

飄飄何所似

飄飄何の似たる所ぞ

天地一沙鷗

天地の一沙鷗

星垂れて平野闊く月湧いて大江流る

細かい草の生えている岸辺には微かな風

— 高い帆柱の舟にはひとり目覚めている私

星が地平線にまで垂れるのが見えるほど平野は広く

月を映しこんで大川は悠々と流れて行く

詩文によって名を挙げることはもう望めない

老いて病む此の身は官職を退かねばならぬ

漂泊のわが身は一体何に似ているのだろうか

まるで天地の間をさまよう一羽のすなかもめではないか

杜甫独特の「倒装法」を用いた名作

七六五年、五十四歳の作。その前年、当時成都の長官で親友であった嚴武の推挙によって任ぜられた工部員外郎の職（工部は尚書省に所属する部局で農林、土木、工業に關する事務を担当した。その工部の下部組織にまた工部というのがあり、主な仕事は城壁や城門、堀などの管理で、杜甫はその監督官の職にあったと考えられ、下級の官職だった）も永泰元年（七六五）四月杜甫の庇護者であった嚴武が急逝したため、やむなく職を辞し、その五月浣花草堂をあとにして、またしても家族を連れて漂泊の旅に出た。長江を舟で下るその旅は杜甫の生涯における最後の旅の幕開きでもあった。この詩は長江上流の四川省忠県あたりで作られたとされる作で杜甫の律詩中でも名作といわれ、詠み終えても余韻が残る作品といえる。

ただ読めば、旅の途中の感想と思ってしまうが、作者の失意と放浪の半生を考えれば、実に容易ならぬ



浣花草堂

事態が背景にあることに思い到る。

歌いだしの二句は一見叙景のようであるが単純なものではない。微風に身を任せて、うち震える細草の頼りなげな動きが暗示するもの、それは作者の来し方を省みて、行く末を案ずる深刻な不安に他ならない。独夜とはいうものの、傍らには明日の生活の保証をしてやれない家族が身を寄せあって眠っている。「独夜」の「独」は「小さい、弱い、頼りない、もろい、定めなき」といったような意味に通じる。「細、微、危」の三字と共に、作者の無力感、孤独感の深い暗示表現となっている。此の詩の中で最も重い一字と言っている。

第一、二句において「細草の岸」「危檣の舟」と読むのが普通であるのに敢えて微風と独夜を割り込ませ、語順を転倒させている「倒装法」は常識を破る意外性に表現の活力を求める杜甫独特の技法としてよく用いられており、イメージ結合の詩的緊張を用意した作者の意図するところを見逃してはならない。

そういう首聯（第一句、第二句）の後に、領聯（第三句と第四句）で作者は改めて自分の置かれている境涯と重ね合わせて見つめたのであろうか。そこには果てしもなく広大な、いかにも大陸的な風景が広がっている。まるで小さな小さな一人の人間の運命になど全く係わりの無い表情で、作者は自身の愁いの大きさも大自然の中ではまるで一

粒の砂にも及ばぬ小さな存在としてしか捉えられない。だからこそ、歌いだしの二句に込められている作者の心細さや孤独感が、更に増幅されて読み手の心に伝わってくるのである。このような首聯から領聯への場面転換は、情景なる眼前の映像から次の瞬間、広大な背景の大映しになる転換の中で目にも止まらない一点を探し求めるようなものであろうか。いわば画像ディスプレイ上の大転換を起すカメラ操作に似ている。実に巧みな構成としか言いようが無い。このような詩的緊張を伴う暗示的表現や場面転換の工夫は、私たちが作詩する際の大きな参考になるのだが、実は、杜甫がこの詩を作った（構想した）場所、四川省忠州（忠県）のその場所には、詩の中に出ているような平野も大江も存在していない。実在するのはそれほど広くもない草っ原と幅狭い川だけだという（石川忠久著「漢詩の講義一七四頁」）。つまり、杜甫は実景を誇張して表現しているのだが、しかしそれは漢詩の作法には欠かせない表現技法で、このように真実とは異なることを言うことによって却って一層深く詩的真実を表現できるということを、私たちは作詩に関して学ぶべきであろう。

時代に翻弄された杜甫 深い憂愁と絶望感

杜甫は七三五年、二十四歳のときに進士の試験を受けて失敗している。三十歳で結婚し、三十二歳のとき李白に出

あい、三十六歳で再度進士の試験を受けたが、愚人宰相李林甫のために落第させられる。詩人は皆、官途について頭角を現わし、経国済民に関する自己の理念を実現しようとするのが人生の目標であり、生き甲斐だった。杜甫も例外ではない。しかし科挙に合格することがもはや絶望的となつては高位高官への途は閉ざされた。杜甫の愁いは戦乱の渦中にある国への愁いであり、又その国を自己の理想とする方向に動かそうにもその立場に立てず為す術のない自分自身の憂いでもある。杜甫の詩に強く流れている気風、気骨は社会の矛盾に傷められ苦しめられている庶民の暮らしを誠実に見つづけた人といえるだろう。杜甫の生涯を見るとまことに不運、不遇の連続に耐え続けた日々であったといえる。都（長安）に赴いたのは三十代の半ば頃だったが、薬草栽培などで辛うじて生計を立てはしたものの、遂に妻子を養い兼ねて四十三歳のとき、妻の実家に家族を預けることになる。杜甫の目が自己の不遇を通して社会の実態の不合理に向かうようになったのは大体この時期以後のことだったと考えられる。翌年、四十四歳になってようやく右衛率府胄曹参軍という官職に就くのだが、これは近衛軍の武器庫の番人のような仕事で最下級の官職だった。

とにかくもこのことを、預けた妻子に知らせるべく急いだ挙句に彼が知ったのは幼いわが子の餓死だった。世の不合理と矛盾に対する杜甫の目はますます厳しさを増してい

杜工部元稹論云山東人李白亦以文章取稱時人謂之李杜子觀其壯浪雄姿
 比聲韻大或千言次猶數百詞氣豪邁而風調清
 屬對律切而脫兼凡近則李尚不能歷其藩
 翰沈堂與乎自後屬文者以模論為
 是甫有文集六十卷



杜甫一『晚笑堂画伝』より

く。「……門に入れば号咷を聞く幼子飢えて已に卒す吾、
 寧ぞ一哀を捨かんや里巷も亦嗚咽す愧づる所は人の父と為
 り食無くして夭折を致せしを豈に知らんや秋禾の登るに貧
 穴には倉卒たるあり……（自京赴奉先県詠懷五百字）」と
 いう絶唱はこの年十一月初め頃の作の一節。この長い詩は
 上層階級の奢侈と、その対極にある庶民の生活苦の実態が
 主題になっている。「朱門（貴族の邸宅のこと）酒肉臭く
 路に凍死の骨あり」という有名な二句もこの詩の中にある。
 更にこの作で杜甫は痛切な政治批判の中に大乱の発生を予
 言するかのような詩句を挟んでいる。「多士朝廷に満つる
 も仁者は宜しく戦慄すべし」と杜甫が警告の筆を収めた数
 日後に起きたのが例の大乱だった。北方の節度使が朝廷に
 叛旗を翻す。安祿山の乱である。妻子の安否を気遣って賊

手に陥ちた長安を脱出、家族の安全確保のために地方を奔
 走中、賊軍に捕われ長安に連れ戻され投獄されたときに「春
 望」という名作が生まれた。いつの日か罪も下級の官吏だっ
 たことが幸いして許され、玄宗皇帝の後を継いだ肅宗の命
 で左拾遺という官職を与えられることになった。左拾遺と
 は従八品上という官職だから下級の官位であることに変わ
 りはないが、皇帝に供奉して皇帝に過ちあらばこれを諫言
 するという、杜甫としてはかなりの生き甲斐を感じられる
 職務ではあった。生真面目で愚直というのは、個人の美德
 としてはそれなりに意味があるが杜甫の場合、これが逆に
 作用した。或る人物が罪不相応に処罰され降格されそうに
 なった。杜甫は職務上当然ながら皇帝に上疏してこれを諫
 めた。このことが肅宗の怒りを招き、朝廷から追放されそ
 うになるが、時の宰相の弁護があって辛うじて出仕を許さ
 れる。しかし馬が合わないということはよくあることで、
 肅宗はそういう杜甫の生真面目で実直な性格が好きになれ
 なかったふしがある。

結局杜甫は鄜州（現在の陝西省の富州、長安（西安）の
 北方二百軒）に難を避けていた家族のもとへ帰されてし
 まった。乱が収まって上皇（玄宗）が長安に帰り幾分の
 落ち着きが都に戻ると再び杜甫は左拾遺として復職する。
 七五七年、四十六歳の冬たった。慌ただしい年で、王維は
 一時期止むを得ず偽官（賊軍の官）となったことをあわや

死刑というところまで追及されたし、李白は肅宗に逆らった母違いの弟王琳の傘下にあったことを罪とされて、夜郎の地に流されることになった。翌七五八年、杜甫は左拾遺の職から華州司功參軍という極めて低い地方官に貶されて長安を去る。結局は嫌気がさして翌七五九年、官を辞して蜀の成都に赴くことになる。四十八歳だった。以後約三年間或る知己の援助を受けて家族と共に比較的落ち着いた生活が続く。その居が世に言う浣花草堂で、今日も四川省の成都の重要な史跡として大事に保存されている。しかしこの地も長年の友であった高適と、最もの後ろ盾であった嚴武が共に世を去った機に、杜甫は数年住み慣れた草堂を後にして、家族と共に最後の漂泊の旅が五十四歳の晩春に始まった。七六五年の五月であった。既に少しずつ杜甫の身体は病に冒され始めていた。

頸聯（第五句、第六句）の痛切な悲嘆と尾聯（第七句、第八句）の絶望的な自嘲のつぶやきを理解して頂くために、杜甫の生涯の一端についての長々しい引用がどうしても必要だった。後、数年で彼の生涯は閉じるのだが、しかしそれに先だって彼は家族と共に一艘の苦舟で寝泊りを始める。洞庭湖に浮かんで薬草を売りつつ、辛うじて生計を立てる最後の数年を過ごさねばならなかった。あまりに痛ましい。そんな最晩年の始まりの頃の感慨なのだ。

「飄飄として何の似たる所ぞ天地の一沙鷗」すなかもめ

は高いところを飛べない。聖天子の再出現を願い、王道を鼓舞して理想の政治を実現させ、庶民を斉しく樂土の民たらしめんとする志を遂に果たせなかった自身を、高みを知らず低い砂地をただただうろつくだけの頼りない存在として省みるしかなかった杜甫の心情を思いやるとき、その傷心たるやまことに思い半ばに過ぎるものがある。

先にとりあげた「登高」はこの詩の二年後の作となる。「……万里悲秋常に客となり百年多病獨り臺に登る艱難苦だ恨む繁霜の鬢潦倒新たに停む濁酒の杯」漢水を遡って長安に帰ろうとする旅の途中で病昂じて死に到るのは、この詩の三年後、七七〇年杜甫五十九歳だった。